

ハーモニー

Harmony

第100号記念

2026年6月26日発行

一般社団法人

日本養護教諭教育学会

General Incorporated Associations

Japanese Association of Yogo Teacher Education

(一社) 日本養護教諭教育学会

事務局：〒162-0801

東京都新宿区山吹町 358-5

アカデミーセンター

TEL 03-6824-9398

FAX 03-5227-8631

振替口座：00880-8-86414

jayte-post@as.bunken.co.jp

目次

機関紙「ハーモニー」第100号の発行を迎えて … 1
ハーモニー第100号の発行に寄せて …… 2
ハーモニー第100号までの歩み …… 2
歴代のハーモニー担当からのメッセージ …… 6
会員の声：私にとってのハーモニーと今後への期待①② … 9
第34回学術集会(愛知)へのお誘い …… 10

投稿奨励研究の選定について(報告) …… 11
2026年度の研究助成金研究の募集 …… 11
「養護学の構築にむけたプロジェクト」について(報告) … 11
理事会の議事について(報告) …… 12
事務局からのお知らせ …… 12
編集後記 …… 12

機関紙「ハーモニー」第100号の発行を迎えて

理事長 後藤ひとみ

本会の定期発行物の一つである機関紙は、学会設立総会の翌月(1992年12月25日)に「通信第1号」として創刊されました。早々に通信の愛称募集が行われ、翌年11月の第2回総会での投票の結果、「はぐくみ」や「はばたき」をおさえて首位となった「ハーモニー」が選ばれ、第4号(1994年1月22日発行)から用いられるようになりました。

当初は年2回～4回発行、2000年度以降は年3回発行となり、学会設立から35年目となる今年、「第100号」発行という節目を迎えたいと思います。

ところで、「ハーモニー」の一般的な意味は“調和”ですが、第50号にご寄稿くださった初代世話人の方々の言葉を紐解くと、機関紙「ハーモニー」に寄せられた期待は次のようなものであったことがわかります。

- ①学会の中核と各会員を結ぶきずなである。
- ②様々な職種や立場の人々が協力し合って養護教諭教育の向上に尽くそうとの意味が込められている。
- ③会員の声や思いが調和し響き合うようにとの願いを込めたものである。

これらの期待に応えるべく、創刊時には世話人の方々、学会誌発刊のために編集委員会が組織された1997年度(第16号)以降は編集委員を兼務した役員の方々尽力されて、装丁や紙面サイズ、レイアウト、ページ数等を適宜変更してきました。最近では、目次は本文の見出しと同じ表記にし、トピックスは長いタイトルでも明示することで、

探しやすい記録資料という価値を維持しています。

編集作業を経験された方はご承知のことと思いますが、印刷物の発行には企画力(執筆者を探して依頼することを含む)と推敲力(内容への専門的な知見を含む)と校閲力(敬語、公文書作成ルールを含む)と構成力(レイアウトや出来映えのための調整を含む)と情報収集力(教育施策の内容理解を含む)などが求められます。

僅か8ページの「ハーモニー」(本紙は特別号にて12ページ)であっても、これらの力を結集する必要があるため、法人化後の編集委員会には2名のハーモニー担当(1名は理事)を置き、編集委員会全体でサポートする体制をとることにしています。

“継続は力なり”という言葉のように、途絶えることなく積み重ねてきた「ハーモニー」100回分から得た叡智は、本会が目指している「養護教諭の資質や力量の形成及び向上」に寄与するものであると確信しています。第100号の発刊を節目として、継続によって得られたであろう功績を質的・量的に可視化し、次号以降のハーモニーが重ねていく歴史の新たなスタートにしてほしいと思います。

様々な出版物が電子化されている昨今、「ハーモニー」を電子化するという選択があると思います。しかしながら、製本し、お一人お一人に送るアナログさに、本学会の会員への温かな思いを感じてくださる方は少なくありません。

今回は、設立総会の発起人23名のお一人であった小林冽子先生(会員番号17)がご執筆くださいました。心よりお礼を申し上げます。会員の皆様におかれましては、今後とも本会へのご支援とご協力をお願い申し上げます。

◇◇◇◇ ハーモニー第100号の発行に寄せて ◇◇◇◇

発足当初の思い出

小林 列子(元千葉大学)

後藤ひとみ先生から「ハーモニー」が100号を迎えるというお電話をいただきました。お話をしているうちに私は発足当初のことを思い出しました。今、思えば、新しい風を起こそうという集まりでした。1992年日本学校保健学会の最終日に「集まりませんか」というようなお誘いがありました。好奇心というよりは私の心に響くものがあり、駆けつけました。堀内久美子先生、大谷尚子先生のお話は説得力がありましたので、発起人の一人に加わることにしました。

名称は全国養護教諭教育研究会となり、第1回の研究大会は1993年11月27日に開かれるというスピードぶりでした。抄録集を印刷屋さんに依頼する予算がなかったので、自分で製本する文具を提案して担当しました。家族と共に作成したことを懐かしく思い出します。収録されている名簿を見ますと、この時点で参加者が100名余りになっていたのも驚きでした。

日本学校保健学会が1995年に千葉大学で開催されることから、私は第3回研究大会の実行委員長を仰せつかりました。けやき会館ができたので場所については安心していただいていたところ、すでに先約があり途方にくれました。加藤博教授が千葉大学大学院自然科学研究科大会議室を使用できるようにしていただき、心より深謝申し上げます。千葉大学の磯辺啓二郎先生、野崎とも子さん、西田マリさんが研究発表に応募してくださったので5件となりました。中川優子さんは抄録集の作成を中心となって行ってくださり、とても有り難かったものです。鎌田尚子先生、石田トミ先生をはじめ附属校の養護教諭の先生方にも支援していただき、無事に終えることができてほっといたしました。

この全国養護教諭教育研究会の研究大会は私の学びの場となりました。他大学では養護実習で学生の力量形成がはかられるような事前指導がされていました。千葉大学でも学生が主体的に養護実習に取り組めるような事前指導を行いたいと強く思ったので、課題といたしました。

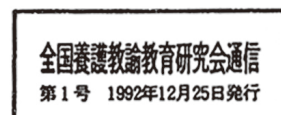
全国養護教諭教育研究会はその後、日本養護教諭教育学会に発展して、抄録集は立派になりました。学術的な研究が目指されているので、年次学会への参加は大いに刺激を受けることでしょう。「ハーモニー」を拝見しますと、会員の声や会員の交流の記事も掲載されていて以前と変わらない部分もあり、何より継続的に発行されてこられたことに感謝申し上げます。今後も応援していく所存です。

◇◇◇◇ ハーモニー第100号までの歩み ◇◇◇◇

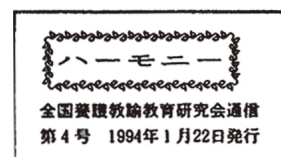
編集委員会委員長 西岡かおり

この度、機関紙「ハーモニー」第100号という記念号の発行に際し、編集委員会ではこれまでのハーモニーを振り返る企画を考えました。

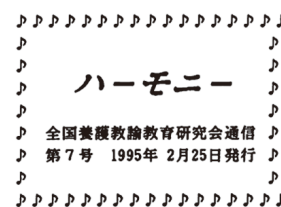
世の中がデジタル化しDX時代を迎える中、現在も「紙」媒体での発行を継続しています。封筒でポストに届くハーモニーを会員の皆様は、どのような思いで手に取りご覧になっていますか。



1992年11月21日に全国養護教諭教育研究会が発足し、翌月に「全国養護教諭教育研究会通信」第1号が発行されました。



1993年の総会において、会員募集したいくつかの名称の中から「ハーモニー」と決定され、第4号から表記されました。タイトルカットも同様に募集されて、左図のデザインとなりました。



第7号からは、「ハーモニー」から連想される♪マークで囲むスタイルになり現在に至っています。

決定された「ハーモニー」は、会員の声や思いが調和し響き合うようにとの願いを込めて、「全国養護教諭教育研究会通信」を引き継いだ世話人の小笠原紀代子先生が提案されたものでした(「ハーモニー」第50号より)。当時の担当者の「ハーモニー」に対する熱い思いが伝わってくるように感じます。

そして、ハーモニーと名付けた1993年から33年の時を経た今、その願いをつなぐことができているだろうかと考えさせられました。これから、さらに5年、10年と調和し響き合えるツールとなるように編集委員会として取り組んでいきたいと思えます。

会員の皆様にも、本号の企画を通して、これまでの歩みを振り返っていただきながら、養護教諭教育の未来に思いを馳せていただけたら嬉しく思います。

次頁以降の企画のうち、「第100号までの歩み」は現在のハーモニー担当である荒川委員と山本委員が主となってまとめました。「歴代のハーモニー担当からのメッセージ」は現在も会員である2003年度以降のご担当にご執筆いただきました。



— 会員への情報提供と交流支援が使命 —

「養護実践」「養成教育」「現職研修」を柱に
養護教諭教育の実現に向けて歩んできたハーモニー

◆ 第100号までの歩み ————— 「トピックス」から見てみよう!!

教育施策等

1991年度 養護教諭制度 50周年

1989.4.1
専修免許状の創設

1993.4.1
・大学院「養護教育専攻」新設
・30学級以上に養護教諭複数配置

1995.1.17
阪神淡路大震災

2001.4.1
複数配置基準が児童生徒数へ

2001.6.8
大阪教育大学附属池田小学校事件

2004.10.23
新潟県中越地震

1992.11
全国養護教諭教育研究会 設立
1992.12
通信 創刊

1994.1
第4号

「ハーモニー」に名称決定
♪ 結ぶ、きずな、協力、調和、響く ♪

1995.2
第7号

【ホットニュース】スタート 看護大学新設ブーム

1995.6 第8号

◎省令改正で養護教諭の保健主事に!! —教育現場の養護教諭の立場から—

1995.9 第9号

◎免許法認定公開講座、女子栄養大学大学院開設

1995.11 第10号

◎免許法認定講習

1996.9 第13号

◎養護教諭の大学院が増える、教員養成審議会の動きに注目を、
大学院養護教育専攻の新設について

1996.11 第14号

◎教育職員養成審議会自由討議より、養護教諭複数配置へのステップ、
養護教諭の研修の充実(平成9年度概算要求より)

1997.3 第15号

◎養護教諭の研修の充実・養護教諭の配置改善について(平成9年度教育予算)

1997.4
日本養護教諭教育学会に改称
編集委員会を組織

1998.9 第19号

◎養護教諭専修免許状取得希望者に朗報!

1999.5 第20号

◎養護教諭専修免許状のための公開講座

1999.8 第21号

◎大学院入学資格に関する改善について
—養護教諭関係を中心に—

1998.3
日本養護教諭教育学会誌 創刊

2000.8 第23号

◎高等学校教諭免許(看護)そして夜間大学院で養護教諭専修免許を! 台湾スクールナース研修会に参加して

2000.11 第24号

◎第7次公立義務教育諸学校教職員定数改善計画が公表、
全養連に「養護教諭の職務検討委員会」を設置

2001.10
総会で養護教諭の英語表記
Yogo teacher と決定

2001.9 第26号

◎国際スクールナース会議に出席して

2002.9 第29号

◎中央教育審議会答申「今後の教員免許制度の在り方について」と養護教諭の研修制度

2003.10
総会で *Yogo teacher* の英語
説明文と学会の英語表記を承認

2003.6 第31号

◎「医療的ケア」をめぐる情勢

2003.9 第32号

◎養護教諭を取り巻く職種等の現状

2004.12 第36号

◎栄養教諭について

2005.5
第37号

【トピックス】スタート

厚生労働省「原則として医行為ではないと考えられるもの」の案を公表、
養護教諭の専修免許状における分野の表記について

2005.7.15
「食育基本法」
施行

2005.9 第38号

◎臨床心理士及び医療心理師の国家資格化にむけた法案作成とその後の動き、
教員養成分野における専門職大学院(教職大学院)の設置について—ワーキング
グループ審議経過の概要—、厚生労働省「原則として医行為ではないと考え
られるもの」の案について(続報)

2005.12 第39号

◎中央教育審議会「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会」の状況

2006.9
日本学術会議「協力学
術研究団体」に指定

2006.12 第42号

◎特別支援教育の推進のための学校教育法等の
一部改正について、2005 ガイドラインによる
心肺蘇生法

2007.3.31
「結核予防法」
廃止

2007.3
「養護教諭の専門領域に関する
用語の解説集<第一版>」発行

2007.6 第43号

◎教員養成改革のきっかけになるか
—教職大学院構想—

2007.9 第44号

◎中教審「スポーツ・青少年分科会」に
おける学校健康・安全部会の動向

2008.6
学会誌が郵便事業株式会社
「学術刊行物」に指定

2008.6 第46号

◎教員免許更新制について～養護教諭
の専門講習 18 時間以上～

2008.9 第47号

◎学校保健法を改正する法律が公布され
ました

2009.4.1
「学校保健安全
法」施行
教員免許更新制
の開始

2010.6 第52号

◎教員の資質向上方策の抜本的な見直しにおける「教員養成6年制」の検討について

2010.12 第54号

◎新たな教職員定数改善計画(案)について

2011.6 第55号

◎養護教諭と「生徒指導提要」・「生徒指導の役割連携の推進に向けて」—確認
と活用を—

2011.12 第57号

◎中央教育審議会「教員の資質能力向上特別部会」基本制度ワーキンググル
ープの資料から

2011.3.11
東日本大震災

2012.3
学会誌第2号発刊 (年2回発刊開始)

2012.6 第58号

◎①中央教育審議会 教員の資質能力向上特別部会「教職生活の
全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について
(審議のまとめ)」の概要

◎②科学研究費補助金「系・分野・分科・細目表」の改正について

2012.10
「養護教諭の専門領域に関する
用語の解説集<第二版>」発行

2012.9 第59号

◎医療的ケアの動向について

2013.1.15
教育再生実行会
議の設置

2013.6 第61号

◎「生きる力」を育む小学校保健教育の手引きが発行されました

2013.9 第62号

◎「男性養護教諭友の会」を紹介します!

2015.6 第67号

◎教育再生実行会議「これからの時代に求められる資質・能力と、それを
培う教育、教師の在り方について(第七次提言)

2015.9 第68号

◎中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上に
ついて(中間まとめ)(平成 27 年 7 月 16 日)」への意見募集

2015.10
総会で「養護教諭の倫理綱領」承認

2015.12 第69号

◎中央教育審議会 初等中等教育分科
会の審議状況について

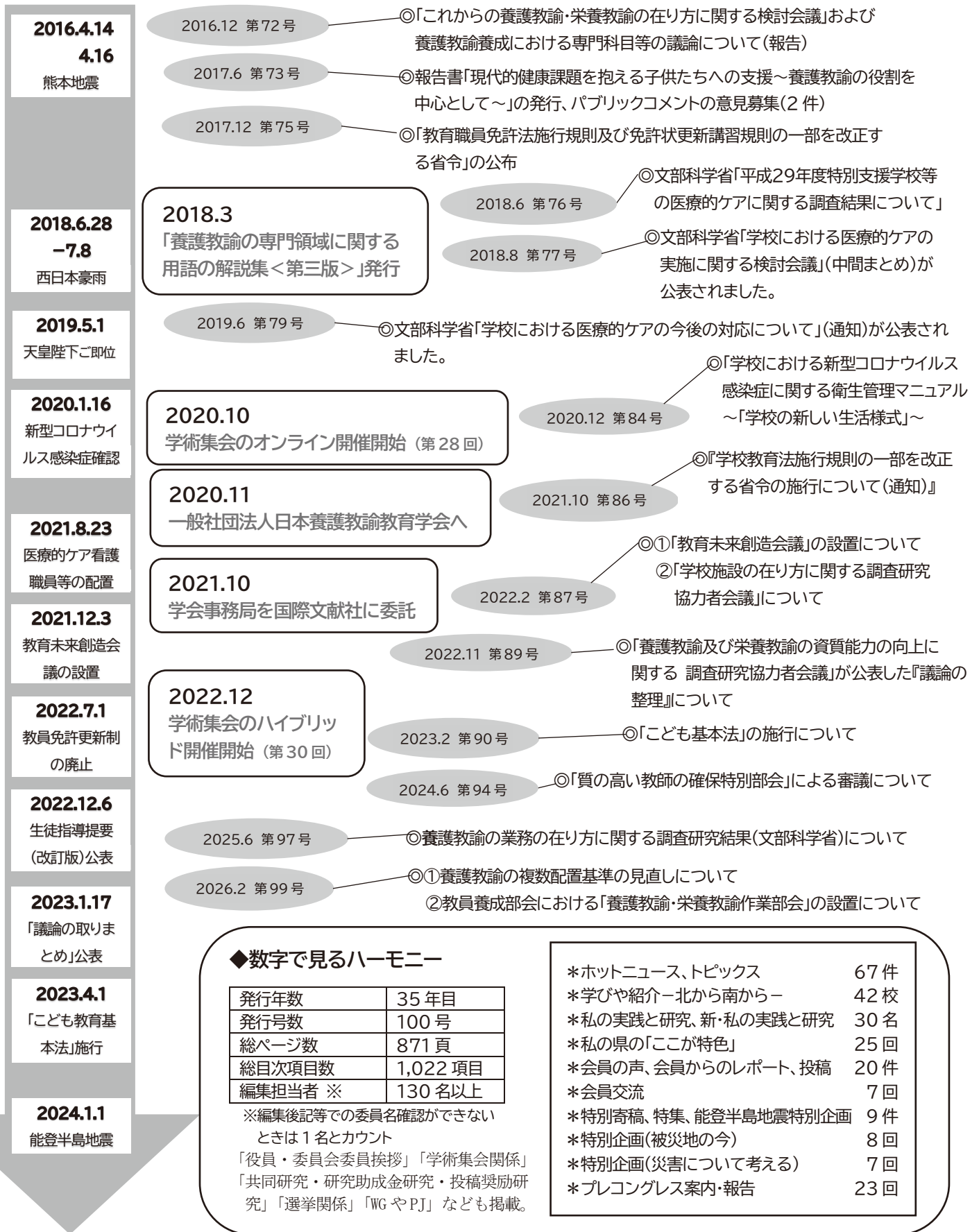
2015.11
日本養護教諭関係団体連絡会
の設立(再結成)

2016.6 第70号

◎中央教育審議会答申に基づく施策にむけた
「養護教諭関係団体連絡会」の取り組み

2016.9 第71号

◎養護教諭関係団体連絡会の取り組みについて(報告)



◆数字で見るハーモニー

発行年数	35年目
発行号数	100号
総ページ数	871頁
総目次項目数	1,022項目
編集担当者 ※	130名以上

※編集後記等での委員名確認ができないときは1名とカウント
「役員・委員会委員挨拶」「学術集会関係」「共同研究・研究助成金研究・投稿奨励研究」「選挙関係」「WGやPJ」なども掲載。

- *ホットニュース、トピックス 67件
- *学びや紹介-北から南から- 42校
- *私の実践と研究、新・私の実践と研究 30名
- *私の県の「ここが特色」 25回
- *会員の声、会員からのレポート、投稿 20件
- *会員交流 7回
- *特別寄稿、特集、能登半島地震特別企画 9件
- *特別企画(被災地の今) 8回
- *特別企画(災害について考える) 7回
- *プレコンgress案内・報告 23回

◆機関紙「ハーモニー」には、“会員への情報提供と交流支援”という役割があります。35年にわたる第100号までの歩みから、様々なトピックスを提供し、会員の実践と研究を紹介し、自然災害からも学ぶ機会を工夫してきたことがわかります。これからも、会員の声や交流を大切にして、本学会固有の「ハーモニー」を充実させてまいります。

◇◇ 歴代のハーモニー担当からのメッセージ ◇◇

機関紙ハーモニーの存在

2003～2005年度：山崎 隆恵（前北海道教育大学）

2003年度に理事なり、3年間ハーモニーを担当し、そのうち2回は鈴木裕子委員、1回は後藤委員長と一緒にだったと記憶している。当時は編集委員会ではなく理事会の中にハーモニー担当を置いていた。第31号に、着任の抱負として最新の情報を載せ、会員の積極的な意見・情報交換の場として活用できる機関紙にしたいこと等を述べた。

第32号から、印刷業者を愛知県から自分の職場のある神奈川県内の連合社印刷にお願いした。第11回学術集会（徳島）のプログラムを載せる号で、校正した原稿を職場まで取りに来てもらい、意気揚々と真っ赤になった原稿を渡し、それを見て真っ青になった印刷業者の様子から、初稿を慎重に整える重要性を学んだ。未だに難しいことだが。

原稿の直接のやりとりはその一回限りで、以後はFAXとメールに変わり、ハーモニー担当が代わっても印刷業者は継続し、今もお世話になっている。また、会員からの「ハーモニーは忙しい時でも、届くとすぐに封を切って読むんだよね。」という声に支えられてきた。

印象に残る内容としては、「養護教諭」の英訳作業の経過報告、第33号で第12回総会報告として「*Yogo teacher*」の英語説明文の承認を載せたことである。そこに至るまでの会員に行ったアンケートの集計作業や熱のこもった意見交換を思い出す。

取り上げたトピックスは、標題だけ追っても、「医療的ケア」、「養護教諭を取り巻く職種等の現状として『特別教育支援コーディネーター』、『キャリアカウンセラー』、『栄養教諭』、「臨床心理士及び医療心理士の国家資格化に向けた法案作成とその後の動き」、「厚生労働省『原則として医行為ではないと考えられるもの』の案を公表」と、現在でもかかわる内容である。

また、「高等学校設置基準に対する本学会の対応」及び「教員養成分野における専門職大学院（教職大学院）の設置について」では、養護教諭に対する文科省の、広くは社会一般の姿勢を知ることになり、養護教諭として専門性の内実をどう整えるか、今後自分たちの職務上取るべき道はどのようなものになるか深く考えることになった。

会員の交流の場として、「特別企画－私の県の『ここが特色』」をスタートさせ、口火を切ったのは愛知県の主任養護教諭制度であった。このシリーズは、2018年の第77号まで続き、最後の番号は㊹であったが、途中番号の飛ばしや重複があり、実質の掲載数は25回であった。このシリーズとは別の企画を第32号で募集した。会員からの反応はなかったが、「私の実践と研究」リレー・レポート」と題し、次の担当に交代した第41号からスタートした。このテーマは、2018年の第78号か

ら新シリーズに改めても、「新・私の実践と研究」であったことから、実践と研究は本学会員にとって追究してやまないテーマであり、ハーモニーが時を経ても保ち続けている意義のひとつで、存在の意味であると言えよう。

“四季の歌”のハーモニーにのせて

2006～2008年度：齊藤ふくみ（九州女子短期大学）

1992年秋の放課後、北海道の高校の保健室に、愛知教育大学堀内久美子先生よりお電話をいただいた。「ふくみさん、この度全国の養護教諭研究会ができたのよ。ぜひお入りください。」とのお誘いであった。堀内先生の弾んだお声から、とても大きな何かがスタートするのだと予感し、早速入会した。翌年、全国養護教諭教育研究会第1回研究大会開催のお知らせがあり、私はせっかくだから、第1回研究大会で発表したいと思い、当時勤務していた室蘭地区の養護教諭の方々との共同研究を口演発表した。会場は横浜国立大学教育学部附属養護学校であった。抄録は千葉大学小林冽子先生手作りの大学ノートのような形で、30数年たった今も貴重な抄録である。

当日、同研究会第2回総会が開かれ、機関紙の名称の投票が行われ、「ハーモニー」が選ばれ、参加者全員で“四季の歌”を歌った。この時の安藤志ま先生の澄み切った声を思い出される方がいらっしゃるのではないだろうか。この時私は、後にハーモニー担当になるとは思いもよらなかった。

本学会HPを確認すると、「全国養護教諭教育研究会通信」第1号～第3号、「ハーモニー」第4号～第6号は事務局でもあった堀内先生がご担当されておられたようである。第7号から第15号までは世話人のうちの1～2名が交替でご担当されていた。理事の一人または二人をハーモニー担当とし、編集委員会委員を兼務してもらったのは、第31号の山崎隆恵先生からであった。私は山崎先生のための第40号～第49号まで3年間担当させていただいた。引継ぎの時のことは今も鮮明に覚えていて、先生が恭しく「これがハーモニー担当者の命なんだよ」とおっしゃって手渡してくださったのは通信第1号から綴じてある紙ファイルであった。その時の厳かな様子から、紙ファイルとともに本学会の理念である「養護教諭の資質向上と力量形成」を目指した活動を支える、眼には見えないけれども熱い“魂”を手渡されたように感じた。本学会は、何よりも養護教諭の実践を大切にしており、私が担当した中での思い出は、第41号からの特別企画「私の実践と研究」のスタートに立ち会えたことである。

さて、20年前、校正作業はもっぱらFAXであった。校正時期と学会等が重なって、旅先のホテルのフロントにFAX送受信をお願いしたのも懐かしい思い出である。校正作業は、担当者⇒編集委員長⇒理事長の順であった。私が万全と思っても、お二方よりびっしり赤字の校正が届くことが常であった。この経験はその後の編集委

員としての仕事の糧となった。

最後にご寄稿くださった会員、理事、現職の養護教諭の方々はじめ皆様に心より感謝いたします。印刷業者様にはレイアウトや季節に合ったカット等でお世話になりました。ハーモニーが今後も本学会の career (足跡) を着実に刻んでいかれ、150号、200号と続いていくことを祈念しています。

ハーモニー第 100 号発行に寄せて — 機関紙担当時代を振り返って — 2009 ~ 2011 年度：鈴木 薫 (前淑徳大学)

1992年の研究会発足から34年、その歩みの中で発行されてきた「ハーモニー」が、このたび第100号を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

私は17年前、本学会の機関紙担当として、2009年4月から2012年3月まで、第49号から第58号の編集に携わらせていただきました。締め切り直前まで原稿を読み込み、「少しでも会員の皆様に有益な情報を届けたい」と、役員の皆様とともに言葉を尽くしながら誌面を整えていた当時の高揚感と責任感は、今でも鮮明に心に残っています。

編集作業を通して、「学会全体を俯瞰する視点」を得し、諸先輩方の養護教諭に対する熱意や会員の皆様の思いに触れたことは、学校教員から大学教員へと環境を大きく変えた私にとって、養護教諭養成や研究に取り組む大きな原動力となりました。また、過去の「ハーモニー」を読み返す中で、養護教諭研究の歩みや課題への理解を深めることができ、今に至るまで研究・教育活動を支える貴重な財産となっています。

現在は学会ホームページのリニューアルも進められ、「ハーモニー」の全号が閲覧可能となりました。学会の歴史をたどる貴重な資料として活用されるとともに、会員相互の情報共有や交流がさらに促進され、新たな会員とのつながりも広がっていくことを期待しております。

担当者の皆様のご尽力に深く敬意を表しますとともに、「ハーモニー」が今後も会員相互の豊かな知の交流の場として発展し続けることを心より祈念し、私の回想のメッセージとさせていただきます。

ハーモニー担当者としてのメッセージ 2012 ~ 2014 年度：古賀由紀子 (前九州看護福祉大学)

私がハーモニーを担当した期間は2012~2014年度でした。折しも学会設立20周年記念誌が2012年12月に発行されることになり、当時ハーモニー担当者であったことから、20周年記念誌に「ハーモニーのあゆみ」について執筆することとなりました。第1号から第60号までを取り寄せ、それらを整理し一覧表にまとめる作業をしました。以後の第61号から第90号までの「ハーモニーのあゆみ」は学会設立30周年記念誌に編集委員会が整理し、掲載されました。

それからさらに歴史が刻まれ、今回100号の記念ハーモニーが発行されることになり、この節目に執筆を依頼され、再度ハーモニーについて考える機会を頂いたことで、20周年記念誌にまとめたことやハーモニー担当者として行っていたこと等を振り返りました。

ハーモニーは、その前身である「全国養護教諭教育研究会通信」として1992年に創刊され、創刊号は1ページで手作りの温かさとともに発足への大きな期待が感じられるものでした。第4号から名称がハーモニーとなり、第16号からは学会としての機関紙となりました。第1号から第60号を一覧表にまとめた内容は概ね「学会の各種事業に関すること」「タイムリーな情報」「会員の声・特別企画」「検討事項に関する意見募集」「総会開催や会費納入等の諸連絡」となっていました。まとめる過程で、これらの記事・情報を通して時代背景や機関紙の役割など様々なことを考える機会となり、ハーモニー担当者の一人としてとても意義のある役割を与えてもらったと感謝しました。

ハーモニーは、会員への情報提供と交流支援を通じて学会活動の促進に大きな役割を果たしていますが、ハーモニーの特徴の一つとして多くの会員に執筆いただき一緒に紙面作りに参加していただいていることがあげられると思います。

私がハーモニーを担当していたときも、特別企画や連載記事、学会参加の感想など、各号で会員の方々に執筆依頼をしていました。私が担当していたとき最も印象に残っていることは、特別企画で「東日本大震災を経験して—被災地の今—」が企画され、被災経験のある方に被災地の今の状況と思いを執筆いただいたことです。辛い思いをされている方に依頼するのは大変心を痛めたこともありましたが、執筆いただいた「被災地の今とその思い」は読んだ会員の心に深く伝わり、貴重な証言としてハーモニーに刻まれています。

会員が執筆者としてご自身の経験や思いを発信し、受け手はその発信から情報共有し様々な考えをめぐらせ、自分の実践や思いへとつなげ、広がっていく。会員の執筆という形を通して情報提供と交流支援が行われていることを改めて感じました。

今後、150号200号と回が重ねられるとき、ハーモニーは時代の変化と共に、変わらないこと変わっていくことがあると思います。しかしこれまで同様、会員と会員をつなぎ、学会と社会をつなぐ機関紙として長く歴史が刻まれていくことを期待します。

ハーモニー第 100 号発行に寄せて

2015 ~ 2017 年度：大川 尚子 (京都女子大学)

本学会の前身である全国養護教諭教育研究会が1992年11月21日に発足し、12月25日には「全国養護教諭教育研究会通信」第1号が発行されました。第4号から「ハーモニー」と改称され今号で100号を迎えたと伺い、大変うれしく感慨深い思いでいます。今までにハー

モニの編集・発行にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

「ハーモニー」という愛称は、「会員の声や思いが調和し響き合うようにとの願いをこめたものである」と、名付け親である初代担当者の小笠原紀代子先生がハーモニー第50号に書いておられます。

私は、第Ⅶ期の理事として、2015年～2017年度の3年間ハーモニーを担当させていただきました。2015年6月10日発行の第67号のハーモニーに、「情報・ご意見をお寄せください！」と題し、「今年度より、新理事として編集委員会ハーモニー担当をさせていただくことになりました。会員の皆様からのご協力を得ながら、学会からの情報を発信していきます。ぜひとも色々な情報やご意見をお寄せください。会員の皆様に役立つハーモニー作りを心掛けていきたいと思っております。」と新理事としての抱負を述べさせていただきました。

それまでの特別企画「東日本大震災を経験して一被災地の今」の思いを引き継ぎ、新シリーズ「災害について考える」を企画し、震災だけではなくさまざまな災害について会員の皆様それぞれのお立場からご報告いただきました。

①(第1回のこと)は工藤宣子先生に「声なきものの声」と題し東日本大震災のことを、②は山村保古先生に「突然の災害で」と題し西日本豪雨災害について、その後は2016年4月14日と16日に発生した熊本地震について、③で古賀由紀子先生に「熊本地震発生から1ヵ月」、④で米井美紀子先生に「熊本地震から四ヵ月過ぎた今…」、⑤で緒方加奈先生に「熊本地震発生から7ヵ月～加配養護教諭の立場から～」と題し震災直後の状況やその後の現状についてご報告いただきました。

最後の⑥は私が「災害支援論の授業を通して考える」と題し、東日本大震災で実際に災害支援活動をした養護教諭に、災害時に「何ができるのか」「何をすべきなのか」を学生が聞き取り記録として残し、その内容を整理したうえで報告会や出版物を通して発信するという「学生“語り部”プロジェクト」についての前任校の取組を紹介させていただきました。会員の皆様が「災害について考える」きっかけになっていれば幸いです。

3年間、会員の皆様からのご協力を得ながら、「ハーモニー」を通して情報を発信することができました。さまざまな情報やご意見をお寄せくださった会員の皆様に、改めて心よりお礼申し上げます。

第100号という節目を迎えることができましたのも、歴代の担当者の先生方をはじめ、原稿をご執筆くださった会員の皆様、そして「ハーモニー」を支え続けてくださった多くの方々のお力添えの賜物であり、心より敬意と感謝を申し上げます。

今後、会員の皆様に役立ち、会員の声や思いが調和し響き合うような「ハーモニー」が発行され続けることを心より願っております。

会員・養護教諭の皆様をつなげる

「ハーモニー」を願ひ…

2018～2020年度：平井 美幸(大阪教育大学)

年度当初の慌ただしさが和らいだ5月のある日、現在のハーモニー担当者の方からご連絡をいただきました。ハーモニーが第100号を迎えるとのこと。担当させていただいたハーモニー第76号～第86号を読み返し、感慨深く思いました。初めて発行に携わった第76号理事挨拶の中で、私は「情報発信はもちろん、会員相互の交流をもっといただけるような魅力ある機関紙となるよう」と述べており、「頑張りがかったのだな」と、改めて自身自身の気持ちを見つめ直すきっかけをいただきました。

当初、ハーモニーの担当者として私はあまりにも未熟でした。前任の大川尚子先生から引継ぎをいただいたものの、どのようにしていくとよいか悩み、手探りのまま取り組んでいました。コロナ禍以前のことで、東京田町駅近くの会場に編集委員会委員が一堂に会し、特集記事などについて協議していたことを記憶しています。“会員の皆様に何を発信すると良いか”、“会員の皆様が相互に交流いただくには”と、協議する中で大切な視点を見失わないように、心に留めていたことが思い出されます。

実際にハーモニーを発行するには、皆様に原稿をご執筆いただかなければなりません。ご快諾いただいたり、残念ながらタイミングが合わなかったりとさまざまでしたが、いずれも、皆様より本当に温かく対応いただきました。支えられる実感をいただいたことに、深く感謝しております。また、この時期は、本学会が法人格を得た時期でもありました。「一般社団法人」と表記された記念すべき第84号を発行できたことは、やり遂げたという達成感を感じる、私にはとても嬉しいことでもありました。編集後記の中で、「本学会の発展を記録することも、ハーモニーの使命」と、ここでも自ら述べていました。今、振り返ると、皆様のご支援により、不甲斐ない私に奮起する力が与えられ、達成感を感じられるに至るまで成長させていただいたことがわかります。まさに、ハーモニーに育てていただいたのだと思います。

2021年に発刊された学会誌第25巻第1号には、「機関紙『ハーモニー』における特別企画の変遷と今後への期待」という記事を掲載させていただきました。編集委員会委員であった青柳千春先生、山崎隆恵先生と共に、ハーモニーの特別企画を分析し、その結果を取りまとめた内容です。第86号までの特別企画の変遷を整理することで、機関紙としてハーモニーが担ってきた役割の一端を示すことができたと思います。皆様、よろしければ学会誌をお手に取り、あるいは、学会Webページからご覧くださいませ。

これからも脈々と紡がれる学会活動において、機関紙ハーモニーは会員をつなげる大切な存在だと思えます。

どうかハーモニーが養護教諭の皆様の一助となり、養護教諭教育の架け橋となりますようにと願っております。末筆ではございますが、第100号の発行を迎えられ、心より御祝申し上げます。

◆2021年度以降の担当者は、現在の編集委員長及び編集委員としてP.2～P.5の執筆を行いましたので、ここでは担当期間等をご紹介します。

- * 2021～2023年度：西岡かおり(四国大学)
山本 訓子(関西福祉科学大学)
- * 2024～2026年度：荒川 雅子(東京学芸大学)
山本 訓子(関西福祉科学大学)

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 会 員 の 声 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

私にとってのハーモニーと今後への期待①

圓岡 和子(愛知教育大学附属高等学校)

『ハーモニー』第100号の発行を迎えられたこと、誠におめでとうございます。そして、長年にわたり、紙面を作り続けてこられた歴代の編集委員の皆様のご尽力に心から感謝申し上げます。

私は本学会で2006年から幹事として、2012年から2020年まで事務局長として、ハーモニーを皆様にお届けする業務を行っていました。その間に、紙面サイズが“B5”から“A4”に、封入方法が“三つ折り”から“折りなし”になるという変化はありましたが、中身は不易流行、温故知新で常に充実しており、改めてその歴史の素晴らしさを感じています。

事務局長としての初めての原稿が紙面に載ったときは、発送作業をするときに何度も読み返しました。「会員を1,000人に」と目標を立てたこと、責任の重さや力の至らなさを感じたことなど、そのときの気持ちを今でも鮮明に思い出します。大変なこともありましたが、これらの経験のすべてが現在の自分を支えてくれています。本当に有難いことです。

養護教諭として学校現場で働く自分にとって、『ハーモニー』は名サポーターです。自分のアンテナが多少鈍くても、私たちを取り巻く制度や法律の変化をタイムリーに教えてくれるので、心配し過ぎずに働けます。また、全国の養護教諭の仲間の実践や思いに触れることで、元気をもらい、保健室経営のヒントを得ることができます。

手前味噌ですが、養護教諭はとても大切な役割を担っている素晴らしい職業だと思います。養護教諭の最大の強みは、「学校の中で子どもを成績で評価しない存在」でいられることだと思います。点数や評定といった枠組みとは関係のない場所で、一人の人間として子どもの揺れ動く気持ちを受け止めようとする存在であるからこそ、子どもたちは、保健室で自分自身とゆっくり向き合うことができると思います。養護教諭のように「スキマ」を埋めてつなぐ存在は、学校という大きくて強固な枠組

みにうまく収まることができなくて、大変な思いをしている子どもたちが、もう一度その子らしく、自分のペースで共同体の中で生きるための支えになり得ると考えています。だから私は、それができる養護教諭になりたいと、学び続けているのです。

第200号が出る30年後は、学校のあり方が変わり、養護教諭という職自体もどうなっているかわかりません。しかし『ハーモニー』に書かれてきた様々な記事(歴史)は、これからの養護教諭の支えになるはずで、正直なところ、私自身が諸先輩方の熱い思いをきちんと繋げられているか自信ないですし、後輩に何かを残そうだななんて、どこかおこがましいようにも感じています。でも、そんなふうには白黒ははっきりつけられない曖昧な状況や、揺れ動く気持ちさえも、そのまま許容されるような優しい学校や社会であってほしいと願っています。日本独自の養護教諭という素晴らしい職と『ハーモニー』が、共にこれからも続いていくことを祈念しています。

私にとってのハーモニーと今後への期待②

井澤 昌子(京都女子大学)

私のハーモニーとの出会いは、初代理事長であり、初代ハーモニー編集者でもあった堀内久美子先生の研究室で、学生として発送作業を手伝っていた頃に遡ります。ハーモニーが届く度に、刷り上がったハーモニーを手にした堀内先生が「会員より早く見られるのがご褒美よ」と嬉しそうに話されていた姿を思い出します。

発送のお手伝いは大学院生時代も続きましたが、当時の私は機関紙の価値を十分に理解しておらず、学会にも入会していませんでした。卒業後ようやく学会へ入会し、ハーモニーを受け取るようになってからは、会員の声などの記事を読むのが楽しみになりました。養護教諭養成に携わるようになってからは、掲載される最新の情報をありがたく活用させていただいていました。

その後、時が経ち、養護教諭養成に携わる中、コロナ禍でこれまでにない環境に行き詰ってしまった時期がありました。そんな折、ふと学会のホームページを開くと、偶然ハーモニー第19号の“学びや紹介”に掲載されていた、恩師である天野敦子先生の「養護教諭の専門性を高める教育をめざして」という記事に出会いました。

そこには、「養護教諭の専門性を深める教育研究がなされるためには(大学院に※)独自の専攻が必要と考え教室が一丸となって養護教育専攻設立のために努力しました。その甲斐があって平成5年に全国で初めての『養護教育専攻』が成立し5年が経ちました。一中略一就職が厳しい現在ですが、講師等をしながら頑張ってくれていることが救いです。」と記されていました。

この記事を読み、時を超えて、当時の講座の先生方の思いを改めて知り、先生方がどんな気持ちで大学院を創り、私たちを送り出してくれたのか、その思いを知る

ことができました。二十数年の時を経て、当時の先生方から励ましを受けているように感じ、胸が熱くなりました。そして、“私にもまだできることがあるはず。もう少し頑張ってみよう”と再び前を向く力をいただきました。

ハーモニー第100号の発刊おめでとうございます！これまで、ハーモニーに記事を書いてくださった皆様、ハーモニーを発刊し続けてくださった編集委員の先生方、そしてHPに記事をアップしてくださった関係の方々へ心より感謝申し上げます。これからも、どうぞよろしくお問い合わせいたします。 ※（ ）内は意味が繋がるよう追記

第34回学術集会(愛知)へのお誘い

学会長 石田 妙美(東海学園大学)

向暑の候、会員の皆様におかれましては子どもたちの健康、成長発達を見守り支援する活動に日々ご尽力されていらっしゃるものと存じます。

日本養護教諭教育学会の第34回学術集会は、2026年11月28日(土)・29日(日)に愛知県の東海学園大学名古屋キャンパス(名古屋市天白区中平2-901)で開催いたします。

愛知県は繊維産業や窯業、工芸品など、古くからモノづくりが盛んな都市であり、1977年からは製造品出荷額等で全国1位をとり続けています。中でも車社会を牽引してきた世界のトヨタとその関連企業の存在は同県の大きな特色と言えます。

そこで、モノづくりが盛んな愛知の特性を意識し、未来社会における人とモノとの融合をイメージしようと考え、学術集会のメインテーマを「養護教諭の未来をデザインするーSociety5.0時代をいきる子どもたちのためにー」としました。子どもたちの未来にむけて、養護教諭として知り、考え、行うべきことを皆様と共に深めたいと思っています。

開催方式は、例年どおり対面とオンラインを併用し、一般演題の発表者は現地参加となります。また、ワークショップにつきましても演習的な方法で行うため現地会場での参加のみとなります。

1日目[11月28日(土)]は、プレコンGRESS、学会長講演、特別講演、シンポジウム、日本スポーツ振興センター案内、情報交換会を予定しています。

特別講演は、トヨタ未来スクールの出張授業の事例からモビリティ社会の将来像について、大道康彦氏(トヨタ・コニック・プロ)にお話をいただきます。

シンポジウムでは、本学術集会のメインテーマ「養護教諭の未来をデザインするーSociety5.0時代をいきる子どもたちのためにー」に迫る内容を企画しています。コーディネーターは愛知県での教育・研究が長い本学会

理事長にお願いし、シンポジストは杉之原明子氏(特定非営利活動法人みんなのコード代表理事)、阿部大樹氏(東京都公立学校養護教諭)、妻鹿智晃氏(帝京短期大学講師)の3名です。

情報交換会は、名古屋城近くのKKRホテル名古屋で行います。「ベリダダンス」で心身を癒やした後は、今年の大河ドラマ「豊臣兄弟!」の豊臣秀吉・秀長をはじめ、名だたる武将ゆかりの地であることから「名古屋おもてなし武将隊」による歴史探訪の時間を設けました。

なお、本学会恒例のプレコンGRESSは受付前の午前中に開催します。今回の運営は、「養護学の構築にむけたプロジェクト」が担当します。内容の詳細は、後日お知らせいたします。

2日目[11月29日(日)]は一般演題発表、ランチョンセミナー、「養護学の構築にむけたプロジェクト」報告、ワークショップ等を予定しています。

一般演題発表(口頭発表・ポスター発表)は、会員の皆様の日頃の実践や調査研究等を可視化し、自由な質疑応答を通して多角的に深めるよい機会になります。

演題申込締切は7月31日(金)、抄録原稿締切は8月31日(月)です。お申し込みをお待ちしています。

ランチョンセミナーは、例年より1件多く、「てんかん」と「電磁界ばく露」と「睡眠障害」の3題を予定しています。ご希望会場は、参加申込の際にお知らせください。

ワークショップは下記の4企画ですが、準備の都合上、参加申込の際にご希望を伺うこととなります。

- ①あなたならどうする?「養護教諭ジレンマカード」で考えよう! 養護教諭の専門性!! : 養護教諭実践研究会: 坂井三代子氏(実践研代表、一宮市立木曾川中学校養護教諭) 他
- ②からだに聴いてこころを整える: 中嶋一恵氏(ヘルスカウンセリング学会資格認定公認講師)
- ③相手の気持ちに届く“声かけ”のつくり方: 井関明子氏(東海ラジオ、ZIP-FM ショッピングキャスター)
- ④自分らしさに出会う絵本作り: 竹田一義氏(一社ライフキャリア絵本協会代表理事)

会場となる東海学園大学までは、名古屋駅から地下鉄やバスを利用して50分ほどかかります。叶うならば対面で皆様とお会いしたいと願っていますが、それぞれのご事情もあるかと思えます。参加方法にかかわらず、当日お目にかかれますことを楽しみにしています。

(詳しいアクセスについてはHPをご覧ください。)

<参加費> 次ページのフォームよりお申込みください。

会 員: 5,000円(8月31日までの申込)

6,000円(9月1日以降の申込)

会員外: 6,000円

学 生: 2,000円(有職者を除く)

抄録集のみ: 2,500円 情報交換会: 8,000円

<連絡先>

(一社) 日本養護教諭教育学会第34回学術集會事務局
〒448-8545 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1
愛知教育大学附属高等学校 圓岡 和子
E-mail: jayte34th@gmail.com



第34回学術集會HP



一般演題発表申込



参加申込

投稿奨励研究の選定について(報告)

学術担当常任理事 鈴木 裕子

投稿奨励研究とは、学術集會で一般演題として発表された研究のなかから2題程度を理事会が選定し、学会誌への投稿をお勧めするものです。特典として査読費用を免除し、学会誌掲載時には投稿奨励研究であることを明記します。

第33回学術集會(京都)の一般演題発表からは、次の2題が選定され、過日、代表者への通知を行いました。

- 家坂玉緒他「健康上配慮を必要とする児童の保健管理について」(第一報)(第二報)
- 須貝あやめ・塚原加寿子「学校におけるLGBTQ+の子どもへの支援に対する養護教諭の認識と支援の実際」

次回、第34回学術集會においても投稿奨励研究の選定を行います。ぜひ多くのご発表を期待しています。

2026年度の研究助成金研究の募集

学術担当常任理事 鈴木 裕子

本会では、養護教諭教育に関する研究の発展を目的として、会員の特色ある研究に対して一件10万円を助成する制度を設けています。

これまで助成金を受けた多数の研究がその成果を实らせ、学会誌等で公表してきました。

このたび、2026年度(研究期間は本年10月1日から来年9月30日)の募集を開始しました。養護教諭の資質や力量の向上に関することなど、日頃より研究に取り組んでみたいと考えている会員の皆様の積極的な応募をお待ちしております。

詳細は学会ホームページをご確認ください。

○申請の締切: 2026年8月10日(月)

○申請方法: 学会ホームページから申請書をダウンロードして記入のうえ、下記までメール添付で送信してください。

○お問い合わせ・申請先:

〒154-8515 東京都世田谷区世田谷4-28-1
国士舘大学文学部 鈴木裕子

メールアドレス: suzukiyu@kokushikan.ac.jp

「養護学の構築にむけたプロジェクト」について(報告)

代表 徳山美智子(元大阪女子短期大学)

はじめに、本プロジェクトのメンバー交代についてお知らせいたします。発足以来2年間ご尽力いただいた前副代表・留目宏美氏および元WGリーダー・籠谷恵氏が退任されました。お二方より賜ったご示唆に深く感謝と敬意を表します。また、齊藤理砂子氏が新たに就任されました。学問的基盤を継承し、今後の活動を一層充実させてまいります。

■ 2025年度三年次活動構想と進捗状況

三年次となる2025年度事業(2026年9月末まで)は、「養護学における基盤的知見の統合と合意の形成」をテーマとして設定いたしました。第一次および二年次の活動で得られた成果を統合し、学会全体で共有可能な基盤を整える段階と位置づけております。理論化やモデル化を通じた体系化を2026年度(四年次)の最終段階の成果とし、本年度はその成果へとつながる基盤形成を目指します。また、理事会より要請された二年次成果(学会誌第29巻第2号, pp.50-55)の共有、会員からの意見集約、プレコンgresでの議論、用語の解説集<第四版>の執筆等の取り組みに加え、書籍の分析を通じて基盤的知見の理論的整序を図ることを活動の構想とし、三年次の基盤整備に反映させてまいります。会員の皆様との多様な機会を通じて、これまでの活動内容を評価・共有し、「養護学の構築にむけたプロジェクト」が期待される成果を創出できるよう、メンバー一同努めてまいります。なお、研究の具体的な推進方法につきましては、次に「5つの柱」として整理し、提示いたします。

■ 2025年度研究の取組み

副代表 北口 和美(元大阪教育大学)

三年次となる本年度は、第一次「養護学への接近」・二年次「養護学固有の特性の明確化」で得た知見を整理・統合してテーマを設定し、学会全体での共有を可能とする基盤整備を進める段階と位置づけます。ここでいう基盤とは、養護学の枠組み、概念、専門性、実践との関連に関する共通理解の土台を指します。研究は2025年度

の活動計画に基づき、次の5つの柱で推進します。

- ①理事会との意見交流の成果を整理し研究に活用する。
- ②会員の意見の集約を行い、研究に反映する。
- ③第34回学術集会（愛知）のプレコンgresで得る成果を活かす。
- ④書籍・解説書・報告書・答申等の分析を行い、知見を深化させる。
- ⑤「養護教諭の専門領域に関する用語の解説集<第四版>」執筆過程で得た知見を研究に活用する。

既存の知見を統合・整理するとともに、書籍の分析を加えて理論的整理を進め、5つの柱を関連づけながら、養護学に関する知見の整理と共有を進めていきます。

多くの会員の皆様のご意見とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

理事会の議事について(報告)

総務担当常任理事 塚原加寿子

ここには審議事項のみを掲載しました。議事録の詳細は、学会誌第30巻第2号（2027年3月末発刊予定）に掲載します。

< 2025年度第1回理事会 >

1. 日 時：2026年2月12日(木) 19:00～21:20
2. 方 法：Webシステムにて開催
3. 出席者：理事14名（欠席2名）、監事2名
4. 審議事項
 - 1) 第5回（2025年度）定時総会（代議員総会）の議事録（案）について
 - 2) 第33回学術集会の実行委員会による総括
 - 3) 第33回学術集会の収支決算（案）について
 - 4) 第33回学術集会及び第5回定時総会の総括による「申し送り事項」の加筆修正について
 - 5) 第33回学術集会における投稿奨励研究の選定（案）について
 - 6) 第33回学術集会の「プレコンgres」の報告について
 - 7) 学会HPのリニューアルについて
 - 8) 「養護教諭の専門領域に関する用語の解説集<第四版>」の刊行について
 - 9) 「養護学の構築にむけたプロジェクト」への対応について
 - 10) 日本学術会議会員候補者の推薦について
 - 11) 2025年度（2024.10.1～2025.9.30）における各委員会の活動計画

< 2025年度第2回臨時理事会 >

1. 日 時：2026年4月10日(金)～17日(金)
2. 方 法：書面による附議
3. 出席者：理事16名、監事2名

4. 審議事項

- 1) 「養護学の構築にむけたプロジェクト」のメンバー補充について
- 2) 「養護学の構築にむけたプロジェクト」のメンバー補充の方法について

事務局からのお知らせ

総務担当理事・事務局長 加藤 晃子

会員の皆様には、平素より学会運営にご理解とご協力を賜り深く感謝いたしております。

● 2025年度年会費の納入をお願いいたします。

2025年度の事業期間は9月30日までですので、同日が年会費の納入期限となります。未納の方は、お手数ですが期限前の納入にご協力ください。

● 「会員登録」の変更をお願いします。

職場の異動等で「会員登録」情報に変更のある方は、学会HPまたは学会誌巻末の変更届にてご連絡ください。

● 「メール登録」をお願いします。

タイムリーな情報提供等のため、会員のメーリングリストを作成しています。メールアドレスが未登録の方は、右のQRコードまたは学会HPからお知らせください。



● 学会誌第28巻第1号・第2号の研究論文等を学会HPに掲載しました。

最新刊の第29巻第1号・第2号は、会員の皆様にはお届けしていますが、HPには第30巻第2号の発刊（来年3月末予定）後に掲載します。

なお、J-stageへの論文掲載作業が大変遅れていますことを担当の委員会に代わってお詫びいたします。今しばらくお待ちください。

編集後記

今回は、ハーモニー第100号までの目次をExcelに書き出す作業から始まりました。ハーモニー100号分をまとめるにあたって、内容を読ませていただくたびに、この学会、そしてハーモニーの果たしてきた役割の重要性に気づき、先生方の熱い思いが伝わってきました。現ハーモニー担当者として、こうした熱い思いを引き継ぎ、これからも皆様に情報発信していきたいと思っております。

（荒川雅子・山本訓子）